2025.6.4

雲　外　蒼　天

No. 5

進路を自分で選ぶということ

先日内田樹（うちだたつる）の「どうしたらいいかわからない時代に僕が中高生に言いたいこと」という長い題名の本を読んでみた。中高生に講演するときに、「進路について」という題を与えられて、筆者は「『好きにすればいい』という一言でおしまいである。」と書いている。中高生が「ロックスターになりたい」「漫画家になりたい」「モデルになりたい」と言うと、「世の中そんなに甘くないぞ」「好きなことをして食っていけると思っているのか」「いやなことを我慢するから給料がもらえるんだぞ」と、たいていの親はダメ出しする。それに対して内田は「『いいえ、好きにさせてもらいます』と好きにするのが正しい子どもの生き方である。」と述べている。もちろん、好きに生きたら必ず成功するというものでもない。むしろ、好きに生きたらほとんどの場合失敗する。でも、自分で選んだ生き方なので、失敗しても自分で納得できると書いている。

これで思い出したことがある。私自身のことである。私の父親は中学校の英語の教員であった。私が高校３年の時に志望校のことで、父と話をしたことがある。その頃（1976 年頃）日本は高度経済成長期から安定成長期に移行した時期で、経済成長の余韻（よいん）はまだくすぶっていて、技術革新がもてはやされている時代だった。それでその時脚光を浴びていた工学部への進学を勧められた。しかし、私は工学部は嫌で理学部に行くと言う。それで「理学部を出て、将来何になろうと思うのか？」と聞かれ、「教員になろうと思う」と言うと、「それなら教育学部に行け」と言う。「いや、教育学を学びたいのではなく、数学を学びたい」と言って、結局理学部数学科に入学した。

大学に入って、数学の授業そのものは大丈夫だったが、英語がその大学で一番厳しいという先生に当たり、ホーソンという作家の比喩（ひゆ）と心理描写の多い作品を読まされた。もちろん、訳本（日本語に訳された本）はなし。私は英語が苦手な上にこの難しい作品で、予習で辞書を引いても書いてあることもわからず、このままでは単位も取れそうもないので、ほとほとくたびれて大学を辞めて帰ろうかと思った。しかしその時思ったのは、父親の勧めも断り、自分で選んだこの学科だったので、辞めるわけにはいかないということだった。幸い友だちにも恵まれ、みんなで集まって勉強会をしたりしてようやく単位を得ることができた。あの時もし父が言うがままの学部に行って同じ目にあったら、父のせいにして本当に辞めて帰っていたかもしれない。

ただここで言っておきたいのは、私は自分の意思を通したが、「金を出さないぞ」と言われ、自分の意思を曲げて親の希望を選ばなければならない場合も当然ある。しかし、この時も、**最終的に決めたのは自分**である。お金の問題でいえば、自分で稼いでお金を貯めてから自分のしたいことをするという方法もある。しかし、親に金を出してもらって親の希望の所へ行くということを決めたのは自分だ。だから、つまずいても親のせいにせず、自分でその責任を引き受けて欲しい。